

# 『大いなる遺産』における暴力

宮崎 孝 一

チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』は多くの暴力的要素を含んでいる。最も明白なものを数えてみても、

二つの殺人事件と、二つの殺人未遂とがある。すなわちマグウィッチが船上で宿敵コンペysonと争い、コンペysonを殺すのが一つ、マグウィッチの昔の妻モリーが、動機は説明してないが過去に殺人を犯したと述べてあるのが一つ、また、殺人未遂はオーリックのミセズ・ジョーに対するものと、同じくオーリックのピップに対するものである。その他打擲、殴打、格闘等の大小の肉体的、物理的暴力に加えて、弱い者いじめ、からかい、相手の意志の無視など精神的暴力とも呼ぶべきものが数々ある。本稿はそ

これらの暴力の意味を探り、それが相手に与える影響を考察しようとするものである。

まず、この小説の主人公ピップは、孤児であるため、姉とその夫ジョー・ガージャリーに育てられたが、この姉はひどくがっしりした手をしていて、ピップばかりか夫さえしばしばなぐりつける。彼女はピップを「手塩にかけて育てあげた」(“I brought him up by hand”)というところが自慢であるが、ピップは、この言葉の意味がわからないうままに、それがなぐられることに関係があると感じ、義兄も自分も、ともに手塩にかけて育てあげられたものと思像していた。また彼女は興奮すると、ピップを「くすぐり棒」でなぐりつける。「くすぐり棒」というのは、先に蠟を

つけたむちで、私をなぐるたびに私の体とこすれるため、滑らかになっていた」(二章)。

ピップは、このような肉体的暴力の犠牲であるのみならず、精神的にも、さまざまな乱暴な扱いを受ける。

私はまるで理性や宗教や道徳の命令にそむき、最善の味方たちが止せ止せというのも聞かずに凶々しく生まれてきたかのように扱われていた。(四章)

クリスマスのご馳走に招かれてガージャリー家を訪れたパンブルチュックその他の大人たちも、申し合わせたようにピップを罪人扱いにする。「手塩にかけて育ててくれた」姉に対するピップの感謝がたりないことを声をそろえて非難し、彼を豚に比し、こんな子は主人の金を盗み、また叔父を殺したジョージ・バーンウェルのような男になるのが落ちだろうと予告する。このように幼いピップをなぶりものにするのが大人たちには、ご馳走の味をいっそう高める香味料の役をしている。「彼らはときどき私に話の矛先を向け、それを私にくざりと突き刺さないと、せっかくの好機が無駄になるとでも思っているようだった。私はスペインの闘牛場に引き出された哀れな小牛のようなもので、

こうした精神的な突き棒を、いやというほどくらわされたのである」(四章)。

ピップは幼児の常として何かとものを尋ねたが、これがまたミセズ・ジョーの癪にさわることになる。監獄船とはどんなもので、どういう人が、なぜ入れられるのかというピップの質問に、ミセズ・ジョーは次のように答える。

「よくお聞き、このちび助。わたしゃ、ひとを死ぬほどうるざがらせようと思つて、お前を手塩にかけて育てあげたんじゃないんだよ。そんなことをしたら、人さまから褒められるどころか、それこそ非難の的になつたらうよ。人間が監獄船に入れられるのは、人殺しをしたり、泥棒をしたり、にせ物を作ったり、いろんな悪いことをするからだよ。それも元はみんな、ものを聞きだがることから始まるんだ。さあ、さっさと寝ることだ」(二章)

ピップは、初めてミス・ハヴィシヤムの邸、サティス荘に招かれてから家に帰ったとき、ミセズ・ジョーやパンブルチュックに対して途方もない嘘をつく。ミス・ハヴィシヤムが黒いビロードの馬車に乗っていて、エステラが金の

皿に載せた菓子とぶどう酒を窓から彼女に渡したとか、大きな犬が四頭いたとか、みんなで旗や剣を振って遊んだなど、彼の想像力の限りを尽くして大人たちを煙に巻くのである。これはピップ自身が認めているように、本当のことを話したところで、とてもわかつてはもらえまいと思ったことにもよるのであるが、一つには大人たちに対する復讐だったのではあるまいか。ミセズ・ジョーも、パンブルチュックも、ミス・ハヴィシヤムとサティス荘のことを根ほり葉ほり知りたがって、たまたみかけるようにピップに質問を浴びせたが、これはまさに大人たちが今までピップの悪癖として指摘していた通りの態度であった。ものを聞きながら、自分があらゆる犯罪の元だと言って置きながら、自分たちは無反省にそれをやっていた大人たちの勝手さに対してピップの怒りが燃え上がったことが、彼の嘘の根本の動機だったと思われる。

ピップが大きな遺産を受け継ぐことになり、紳士としての教育を受けるようになったとたん、今まで親切に自分をかばってくれたジョー・ガージャリーからできるだけ遠ざかろうとする忘恩の行為は、当然非難されるべきものである。しかしこの行為の底には、幼時吹きこまれた自分の将来に関する予言、すなわち主人と親戚に反いたバーンウェ

ルのような者になるだろうという言葉が、暗暗裏に作用していたのではなからうか。よいにつけ悪いにつけ、幼いき大人から言われた言葉が人間の行為の方向を決めることは現実によく見られるところである。これより前、ミセズ・ジョーが何者かに襲われたと聞かされたとき、ピップは次のように感じたことがあった。

ジョージ・バーンウェルのことで頭がいっぱいになっていた私は、最初、この姉に対する加害事件に自分が何か役割をつとめたに違いない。とにかく、彼女の身内であり、世話になっていることが知れ渡っている者として、自分こそ、他のだれよりも嫌疑を受けるのが当り前なのだと思つた。 (十六章)

ピップの頭にはこのようにバーンウェルのことが強く刻まれていたのである。

ミセズ・ジョーは、この攻撃を受けた後、思考力も記憶力も非常な障害を受けるが、気質は前とうって変わっておだやかになり、辛抱づよくなる。ことに今まで何かと争っていたオーリックと和解したいという希望を身振りで表わし、彼の機嫌を取り結びたい様子を示す。彼女をなぐり殺そうとした犯人がオーリックであることは、ほぼ確かであるのに、その当人に対するミセズ・ジョーの態度の変化はまことに不思議である。その理由を考えてみると、彼女は親に死なれ、幼い弟をかかえて途方に暮れていた自分を救ってくれたジョーを、彼の親切さとやさしさの故に、かえって軽蔑していたのではあるまいか。結婚後もジョーは、彼をなぐりつけるほど気性の荒い彼女を抑えることもせず、ピップといっしょになって共通の犠牲者の身に甘んじていた。そのような夫を不甲斐なく思えば思うほど、ますます彼女は荒れ狂わなければならなかった。その彼女が初めて彼女以上に荒荒しいオーリックの暴力に会い、マゾキスティクな満足を感じたのだと考えるのは無理であろうか。

オーリックの狂暴性は、この後も二度示される。一度は

彼がピップを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ  
とである。それはビデオに対するオーリックの求愛をピ  
ップが邪魔したものと思ひこみ、また、ジョーの鍛冶場を  
止めた後就職したサティス荘から彼を追放することをピッ  
プがミス・ハヴィシヤムに勧めたことをうらんだためであ  
った。次のオーリックの犯行は、パンブルチュックの家に  
押し入り、金を奪いパンブルチュックをなぐって気絶させ  
ることである。彼の狂暴性は、ミセズ・ジョーのそれとは  
段違いであり、明らかに犯罪者のものであるが、善悪の判  
断をぬきにして、ただ彼の持つ激しさに彼女がある魅力を感じたということはある。

同様のことはエステラについても言える。ピップが二度  
めにサティス荘を訪れ、エステラに導かれてミス・ハヴィ  
シヤムの部屋へ行くとき次のようなことがある。

二人で蠟燭の明りに助けられて廊下を歩いていたと  
き、エステラは突然立ち止まってくるっと振り向き、  
彼女の顔を私の顔にくっつけるようにしながら、あざ  
けるような調子で言った。

「どう？」

「どうって？」あやうく彼女に倒れかかりそうにな

りながら、やっと踏み止まって私は言った。

「あたくし、綺麗？」

「ええ、とても綺麗だと思えます」

「あたくし、失礼だと思う？」

「この前のときほどじゃありません」

と私は答えた。

「この前のときほどじゃないんですって？」

「ええ」

この最後の質問をしたとき、彼女の顔は紅潮していた。そして私が答えたとき、ありったけの力を出して私の顔を平手でなぐった。

(十一章)

少女時代のエステラはずでにこのように激しいものを持っている。

この日ピップは、サティス荘を辞するとき、蒼白い顔の少年に突然喧嘩を売られる。少年は口ほどにもなく腕力がなくて、ピップはさんざんに彼を打ちのめす。その直後エステラに会うと、彼女の顔は上気していて、嬉しそうにピップを小径の中へ導き、「キスしたければ、してもいいよ」と頬をピップにさしむける。このエステラの態度の激変もまた、彼女の暴力を好む気持ちを示している。

この格闘の後ピップは、自分が年若い紳士の血を流したからには、法律によって罰せられるだろうと思ひこみ、数日の間家に閉じこもって裁判所で申し開きをする方法を考えたりした。彼の心がこういう働き方をする事にも、彼が姉をはじめ大人たちから犯罪者扱いをされて育ってきたことの結果が見られる。後にロンドンで紳士修行をするようになったピップが、この蒼白い少年に再会する場面がある。少年はハーバート・ポケットという名で、ミス・ハヴィンガムの遠縁に当ることがわかるが、彼はあの格闘のとき、自分こそピップを打ちのめしたものと考えていた。

「ハーバート・ポケット君は、彼の意図と実際とを混同してしまっているなと私は思った」(二十一章) とピップは述べている。すなわちこの格闘は気の弱い二人の少年が、互いに相手を傷つけた(あるいはそう思いこんだ)ことで、悩んだ話として、他のもっと激しい暴力の例と対照されて、ヒューマラスな効果を發揮している。

さて、美しい娘に成長したエステラが、青年になったピップの真剣な求愛には見向きもせず、家柄がよくて金がありはするものの、甚だ鈍い男ドラムルと結婚してしまうことも、この小説の含み謎の一つである。彼についてピップは次のように記している。

いつも仏頂面をしていて、本を持って開くときさえ、その著者のために傷つけられたことでもあるかのような表情を示すベントリー・ドラムルは、私と知り合いになるときも、やはり、むっつりしていた。体つきも、動作も、理解力も、すべて鈍重で——にぶい顔つきをし、大きな、不恰好な舌を口の中でゆっくり動かすさまは、彼自身部屋の中をだらりだらり動き回るのに似ていた——怠け者で、高慢で、けちん棒で、打ち解けず、猜疑心が強かった。サマセット州の素封家の生まれだったが、家の人たちは、こういう性質の組み合わさった彼を育て上げた末、丁年には達したものの、のろまの鈍物であることを知ったのだった。

(二十五章)

ドラムルは仲間の青年たちの嫌われ者であるが、ピップの後見人ジャガーズの家の食事にピップその他と招かれたとき、ジャガーズだけは、ドラムルに対して強い興味を示す。彼はドラムルを「蜘蛛」と呼び、特に彼のために乾盃し、若者たちが口論のすえ興奮し、ドラムルが大コップを投げつけようとしたことにも驚かず、別れぎわにピップに

「あいつは本物だ」と意見を漏らす。

ところで、ジャガーズは、殺人者その他の重罪人たちを幾度か、刑から救ってやったことのある敏腕の弁護士である。しかし彼は弁護依頼人たちを人間扱いはしていない。

この機会に言って置くが、ジャガーズは依頼人たちを「洗い落とす」のであった。外科医や歯科医のやり口であった。彼の部屋には、そのために装置した洗面所があつて、そこは、まるで香水店のように香料入りの石鹸の匂がしていた。そのドアの内側の巻軸には、恐ろしく大きな回転タオルがあつて、彼は刑事裁判所から帰って来たり、部屋から依頼人を送り出した後はいつも必ず手を洗い、タオルでふいてすっかり乾かすのだった。

(二十六章)

このように、彼が依頼人たちに接する態度は、まるで不潔な品物に対するごとくである。彼が外出すると、多くの依頼人たちが待ち受けていて彼の意見を聞こうとするが、彼はその熱心な嘆願に一顧も与えず、居丈高な態度でさっさと通り過ぎてしまう。彼がマグウェイッチの昔の妻モリーを刑罰から救ってやり、家政婦として使っていることに

も、彼特有の心理が潜んでいると思われる。モリーは、男のだれにも負けないほどの握力を持っており、この手であつて殺人を犯したのだが、今は「飼ひ馴らされた野獣」のようである。ジャガーズはこのようにモリーを屈服したことに満足を感じているのであろう。

このようなジャガーズが、ドラムルを「本物」と呼ぶのは、やはり、彼の中に狂暴なものを見出したからに違いない。エステラがドラムルと結婚する決心をするのも、彼の財産以外に、彼のこの狂暴性に引かれたのであろう。少年時代のピップはエステラから侮辱され、冷たくあしらわれても、ただ涙を流すだけだったし、青年になつてから、ますます彼女に恋いこがれても、ただ憂愁に胸をふさがれて彼女の家のまわりを徘徊するだけであつた。エステラには、このようなピップの態度は物たりなかつたであらう。

エステラとドラムルが結婚することになつたとピップがジャガーズに告げたとき、ジャガーズは次のように言う。

「あいつは、あいつなりに有望な奴だよ。だが奴だつて、自分の気ままにはかりはなるまい。結局は意志の強い方が勝ちさ。……もし奴が本気になつてあの娘をなぐつたら、奴の方に強みがあるだろう。頭の問題になつたら、そうはいかん。……ドラムルのような奴は、なぐるか、すくむ

か、どっちかだ。すくんで、うなるかもしれないし、しかもうならんかもしれない。だが、なぐるか、すくむか、どっちかだ」(四十八章)

エステラは、彼女特有の激しい気性によつて、サディズムとマゾキズムの奇妙に混合した動機から、ドラムルに興味を感じたのであつた。この点、彼女の傾向は、ミセス・ジョーのオーリックに対する気持ちに通じるものがある。しかし、結婚後のエステラは、ドラムルに繰り返しながられることにより、ついに彼と離婚するし、ドラムルは乗馬を乱暴に扱つて、振り落とされて死んでしまふ。暴力は結局悲劇にしか導かなかつた。

### 三

ピップが急に金持ちになつて、ロンドン行きの服装を調えるため仕立屋のトラップの店に立ちよつたとき、トラップは店の小僧の動作が鈍いといふので、さかんに叱り飛ばし、最後には彼をなぐり倒しさえした。これはピップに対

する尊敬の気持ちを示そうがための、トラップの浅はかな計算による暴力だった。

後にピップがすっかりロンドン紳士になりすまして、故郷の町を訪れたとき、偶然このトラップの小僧に会う。すると小僧はわざと手足をふるわせ、歯をがたがた鳴らし、埃の中に土下座してしまった。小僧はピップの道を先回りしては同様の動作を何度か繰り返し、「こわいよー」と叫び、最後には哀れっぽい声で鶏の啼き声のまねをしたが、これは鍛冶屋時代のピップを知っていることを当てつけたものだった。トラップの小僧はこうしてピップの思い上がりに冷水を浴びせたのである。

ピップに大きな財産がころがりこんだと知ったとき、今まで彼を見くだしていた大人たちはすべてがらりと態度を変えた。パンブルチュックは平身叩頭してピップに握手を乞い、自分の商売に出資してくれることを頼みこんだし、素朴なはずのジョーさえ、今までのように心おきなくピップに對することはできなくなってしまった。

仕立屋トラップの豹変ぶりは今見た通りである。こういう頼りない大人たちの中にある、トラップの小僧の取った態度は、たしかにいたずらには違いないが、内面に一つの健全な判断を藏したものである。後にピッ

プが、オーリックにおびき出されて危うく殺されそうになったときも、救援に赴いた友人たちを沼地の小屋へ案内したのは、このトラップの小僧だった。それは、こわいもの見たさの好奇心に発するものと見られないこともないが、この小僧の気持ちの根底に、まじめな心の働きがあったのだ、と解釈することもできよう。オーリックとトラップの小僧とは共に主人に使われる身として同様の境遇にあり、それぞれに不満を持っているが、オーリックの反応が陰性で常に犯罪に通じるのに対し、トラップの小僧のそれは明るく健康的である。

さて、ピップが幼時から犯罪者の意識を植えつけられるのは、前に見たように姉の教育による所が大きい。さらにそれを決定的なものにしたのは、彼が脱獄囚マグウィッチにおどかされて、姉と義兄の所から食物とやすりを盗み出し、マグウィッチに与えたからであった。マグウィッチは湿地で会ったピップを逆さに吊し上げ、お前の肝臓をねらっている男がいるから、もし約束を果たさなければ、その男に食い殺されるようにさせてやるぞと脅迫する。ピップはこの暴力に屈服して盗みを働き、その後長く「囚人たちと秘密の陰謀で結ばれている」ことに罪悪感と自己嫌悪を覚えることになる。



しかも、マグウィッチによるピップの被害は、これに留まらなかつた。マグウィッチは、紳士階級に属するコンペysonに利用され続け、罪を重ねてきた怨みから、オーストリアでもうけた金の力で、ピップを紳士に仕立てて、自分のできなかつたことを彼によって達成しようと考え、ピップは自分に与えられる莫大な金の出所を知らぬまま、鍛冶屋の徒弟から足を洗えたことを喜び、行く行くはエステラと結婚して裕福な暮らしをするつもりでいたのだが、マグウィッチが、自分の恩人だったのだと知らされたら、ん、すべての夢は崩れる。マグウィッチのひとりよがりの計画は、ピップの了解なしに、ただ彼を道具として用いたものであり、やはり一つの精神的暴力であつた。この小説の最後の部分では、ピップはマグウィッチの気持ちに理解を持つようになりはするものの、結局マグウィッチはピップの人生行路を狂わす否定的な力として働いたのである。同様のことは、ミス・ハヴィンシャムとピップとの関係についてとも言える。ミス・ハヴィンシャムは、若いとき心を捧げたコンペysonに裏切られたことから、男性全体に対する不信をいだき、男性に対する復讐心を満足させるために、ピップがエステラを愛するようにしむけ、エステラが自分の恋に報いてくれないことに彼が懊惱するのを見て、ひそ

かにほくそ笑んでいたのである。ピップはマグウィッチとの関係におけると同様、ミス・ハヴィンシャムによって道具として使われたのであつた。最後の別れに、ピップがサテイス荘を訪れて彼女の部屋をのぞいたとき、暖炉の火が彼女の衣服に燃え移るのを見て必死に消し止めようとすると、「二人はまるで不倶戴天の仇敵どうしのように床の上でもみ合つた」(四十九章)と記されているが、ピップに何の意図も知らせることなしに彼をただ利用しようとしたミス・ハヴィンシャムは彼に暴力を加えたのであり、事実、彼の仇敵だつたといえる。

今まで見てきたように、この小説には、大小さまざまな物理的、精神的暴力が描かれている。しかも、その暴力がときに人を魅惑する力があり、また善意に発することさえあることも見た。しかし、所詮暴力は暴力であり、その力が強く、その対象が弱ければ弱いほど犠牲者の受ける苦痛と被害は大きいことが示されている。